

— 1959. X. —

LEBEN

第 2 号

開 学 1 0 周 年 記 念 号

鹿 児 島 大 学 生 物 研 究 会

目 次

| | |
|--------------------------|------------------|
| 0 開学十周年記念号発刊に際して | 1 |
| 0 少年の日の植物学 | 山 根 銀五郎 2 |
| 0 「メヒルギ」於喜入村 | 松 本 培 夫 3 |
| 0 栗野岳の蝶類・〔採集報告〕 | 田 中 洋 6 |
| 0 栗野岳の甲虫類・〔採集報告〕 | 堀 田 宗 浩 14 |
| 0 栗野岳 植物採集記 | 鮫 島 建 15 |
| 0 大隈半島——國見岳——歩行記 | 竹 迫 堅之助 18 |
| 0 屋久島行 | 浜 畑 太 海 19 |
| 0 仙人掌(サボテン)記 | 木 場 訓 21 |
| 0 鹿児島市附近産ゴキムシ類 才1報 | 堀 田 宗 浩 23 |
| 0 小林市付近のカメムシ類 | 田 中 洋 25 |
| 部 員 名 簿 | 28 |
| 編 集 後 記 | 30 |

開学十周年記念号発刊に際して

ここにLBBEN 才二号を発刊致します。

この会報が皆さんのお手許に着く頃には、大学全体が10周年記念行事で賑わっていることでしょう。私達生物研究会も、これを記念してここに、ほんのささやかなる会報を発刊できましたことはひじょうに嬉しく思います。

でも皆さんが一頁を開けて、失望してしまわれるかもしれないと思うと、とても心配です。この長い間、先輩諸兄の作られてきた会報を比較してみると、私達のそれが、いかに無力なものかよくわかるからです。

どうしたためか、この2、3年前から生研の活動はすっかり衰えてしまっているようでした。私達部員はこれをどうにかして以前の生研（それがいかに活発だったか保存されている会報より想像できます。）にもどそうと努力致しているところです。そして、昨年より、会報の発刊もでき、どうにか活動し始めました。

今後、私達の努力の足りない点、お気づきの点などについては、諸先生、先輩、並びに同好のよしみある諸兄より、助言、叱責を得生研のよりよき活動を念願致します。

1959年11月 堀田宗浩

少年の日の植物学

山根 銀五郎

植物に心をさそわれるようになってのはいつの頃だろうか。小学校の五年位のときに、庭のぐみの木の下に一米平方ばかりの囲いをして黄色の大輪のすいせんを植えたり、矢車菊の種子をまいたりしたのを覚えている。シヤクヤクの芽が早春の土から顔を出すつかしきは今思い出してもなつかしまれる。

やはりその頃ではないだろうか。九つ上の長兄が日本アルプス白馬岳にのぼつて、お花畑からとつてきた高山植物の腊葉を10数葉もらつた。干らびたもので美しくなかつたが、日本アルプスなる未知の世界の賜もどて、少年の日にはかけがえのない宝ものだつた。ミヤマキンバイヤトカクシヨマの名をいまだに覚えている。

父の郷里からとつた伯母がたずねてきたとき、その兄が伯母を案内して幼い兄弟をひきつれて鎌倉見物に出掛けた。今は1時間もかからず電車で1走りの鎌倉だが関東大震災前の頃だつたから、もちろん汽車で1日がかりの遠出だつた。鶴ヶ岡の八幡宮に詣で、長谷の大仏を仰いだ後、稲村ヶ崎を廻つて七里ヶ浜に出た。波打ちわで緑の海藻、紅い海藻をひろつて帰つた。水に浮べ、サランを敷いて海藻の標本をつくつた。

6年生の頃には鉱物標本にとつつかれて、買いあさつた。もちろんわずかな小使銭のうちで買うのだから知れたものだが。学校の帰りに飯田橋のガード下の傍にあつた岩本鉱物店に友達につれられて行つた。方解石、ザクロ石、黄鉄鉱、玉石の結晶など胸をわくわくさせてポケットに入れて帰る。菓子折の木箱を厚いボール箱で仕切つて、白い青海綿を敷いては丁寧に納めた。自然金、自然銅……クジャク石……。そのような箱が7つ位たまつて行つた。大正12年の大震災のときには9月1日とて2学期の始業式から帰つて、この鉱物標本をたのしみにいじりまわしているときだつた。なにか訳が解らずに棚から落ちそうになる標本を両手でしつかりおさえたが、やがて壁は落ちて砂塵りをあげる始末にビックリしてやつと縁側から庭にとび下りた。家は10度以上も傾いた。ゆれる縁から庭ことびおりのも仲々むずかしいことを知つた。この震災で東京も一変し、自分の少年時代も終つて、やがて中学校に行くことになる。

中学校は五中といつて当時の新しい行き方として理科教育を標ぼうした。生物学会という団体があつたのでなんとなく入つた。博物教室の準備室に入れるのがなんとなくうれしく胸をときめかした。上級生につれられて、外房州の御宿に海藻採集に行つた。波の荒い岩浜に名を知らぬ海藻がゴツソリある。訳も分らず胸乱につめこんで、家に帰つてから標本にした。浜でひろつた紫色の小さい巻貝がとても珍しいものだと思つたが、これは敲つておいたうちになくなつてしまつた。

夏休に入ると一週間位の信州旅行に学校からでかけた。長野市の後ろの戸隠山に行つた。山に登るのなんかはじめてで、都会育ちの自分には1木1草が珍しい。イワガカミとかダイヤモンドソウとかオヒヨウとか造つた標本は珍重そのものだつた。岩先にさいていたグンナイフワウの1

本を手をのばしてとつたよろこびも忘れない。

その頃だつたらうか。その生物学会で代る代る研究発表(?)をするのだが。前の晩かいた図をつかつて細胞分裂の話をした。ポーズとなつてしまつて、終つたときにはドアを排して廊下に出て風にあたつた。

伊藤長七先生という頭のすつかりはげた先生がこの新時代を標ボウする中学の校長先生だつた。洋服も背広風で、金ボタンだが、胸はあいてツケネク(タイ)をしている。この校長先生の奨励のためだろうその生物学会(?)にきていて、自分が廊下に出たあと、「今の生徒は戸隠山ではきれいな歌を歌つた(別れの夜の茶話会)。今きてみれば同じ生徒が立派な研究発表をしている……」。あとにもさきにもこんなにほめられたのは1度だけしかない。

この会で生物学会報というのを出していた。ずい分厚い騰写ずりのものだつた。一文を草して投稿した。「種の起源」をよんだので生存競争についての、同種間の競争が異種間の競争よりはげしいことについてのことだつた。

2年のときだつたらう。その後校友会雑誌にも生物学論的なことをかいた。2つとも戦災でやいてしまつて手許にない。中学校も焼けたのでどこにもないだろう。

高校に入つてからは武蔵野を逍遙した。林の中にもつけた野草に限りない愛着を覚えたものだ。井ノ頭公園から玉川上水のあたりの林、野火止の平林寺あたりはいく度行つてもあきなかつた。その頃を想い出すと、採つた植物の名よりも、野草に托された青春の夢が今になつかしく甦つてくる。

(34, 11.7)

※ 筆者は鹿児島大学 文理学部教授 (理学博士)

「メヒルギ」於喜入村

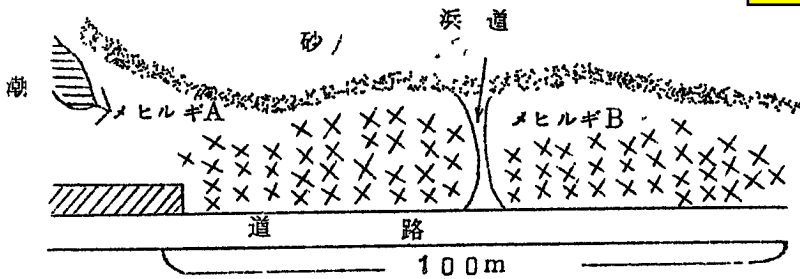
文理・生物専攻 松本培夫

メヒルギの自生地の北限は生見に生育しているものがそうであるが、まだその群落はあまり大きくないよつて、むしろ私は喜入村のものが観察するには好都合だと思ふ。

私は昨年、7月9日にここに訪れたが、以下その時の観察を綴つてみる。左図は簡単なその群落の見取図であるが、長さ100米程のものを縮めたものである。メヒルギはちょうど開花期にあつて、白色幾分緑色を帯びている花の四花弁を一斉に開いている最中だつた。

Fig 1

(析 折)へ訂正



この植物がマツヨイグサの類に近縁かと思うと不思議な気がする。例の甲折も花卉にぶら下がっている。本来ならとつくと落ちてははずのものを、今だにぶら下げているのはこの植物の一つの特権かもしれない。

見取図でもわかるように、メヒルギの生育範囲は道路と砂の間である。しかもその砂は年々その範囲を広げるもので考慮すべきものではなからうか。

元来メヒルギは周知の如く、所謂マングローブ植物で、熱帯・亜熱帯の浅海の泥土に生育するもので、その胎生は有名な事実である。ところが、おどろいたことに、彼等の少数ではあるが、砂の中に根をおろし、その上に甲折を、5、6本落しているのがあるのだ。今私は道で、区切られているのをそれぞれA、Bと記して論じて行きたいと思う。

Bの方はほとんどが2米半程でAの方に比べて全体として大きく明に最も古く漂着したものと思われるが、生育土質は、コブシ大の石でぎつしりと敷きつめられ、粘土質の上が所々に顔を出している。しかも木から落下した甲折はやはり根を下して、小さな木が校内の諸々に散見するのである。勿論、足は全然濡れる心配はない。しかしこれが雨期ともなれば事情は一変するだろう。

Aの方はまだ、木々は若く従って文字通り林立して私が入って行く余地はなく、土地も潮が入ってくる関係で、ずぶずぶ入り込む。

一つ一つ丹念に根本の処を見て廻つたが、一寸しか呼吸根は出していなくて、やはり環境のためかと思われる。植物分布の問題に関して甲折が色々問題にされるが、私も色々それ等に関して観察して見たので、以下その事に関して記してみる。

甲折は次の様な形をしている。

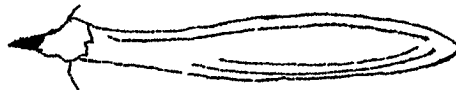


Fig 2

これは20cmばかりの胎生本であるがこれが地上に落ちて生育し、或いは水に浮いて遠く運ばれるという工合である。

甲折が落ちて生育する関係を見ると、色々ある。泥土にまつく落ちて、つきささりそのまま

根を生じるもの。或いは横倒しのままのもの。色々考えられるが。泥にそのままぬかるものはめつたに見なかつた。かえつて横倒しのものが多く。その上に土がかぶさつて根を出している。又或物はぎつしりを繁つた木々にもたれかかっているものもあつた。A群はほとんど横倒しであつたがB群になると土壌の関係で立つた状態のものが多かつた。或程度發育して葉を二、三枚出したものを横から土を取り除いて調べて見ると土に埋れた時の状態がよくわかる。二、三土を取り除いて調べてみたが横倒しのものが多かつた。(Fig 3)

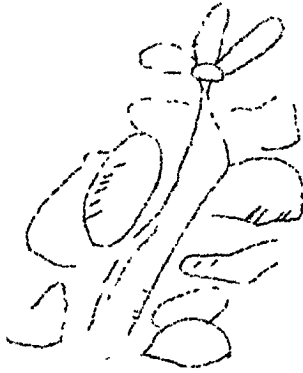


Fig 3

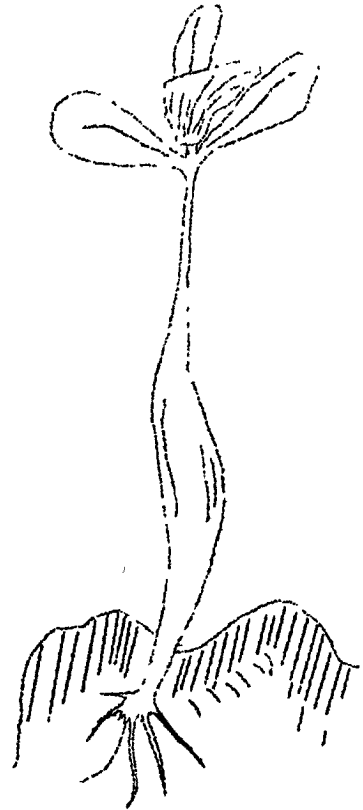


Fig 4

⇒ 筆者紹介 松本 培夫
 文理生物学科 2年 植物班

生物科専攻の彼にとっては、生研の活動も直接的に関係する。彼の下宿を訪れた方はその書物の豊富さにびつくりされるでしょう。自然科学書が本箱にも入りきらずに、所狭しとばかりに床の上に並んでいる。もちろん牧野さんの図鑑はたいいそろつている。書物だけでなく彼にうかがつた人はわかるごとく植物に関する彼の知識はすばらしいものです。

それにもう一つ。彼は近頃ロシア語に憑かれているようで「戦争と平和」の翻訳にかかりつき。彼の特性はこの独学に存する。

栗野岳の蝶類〔採集報告〕

医学部一年 田 中 洋

1959年夏、鹿大生研のメンバーとして栗野岳に採集に行った。

主としてウスイロオナガシジミの採集に時を費し、タツバンルリシジミを求めていたので、採集コースにNaをつける仕事なども便宜的なものになり、分布調査は充分できなかった。(なお、栗野岳温泉に宿泊中の食事などは会長の堀田さんほかのみなさんのお世話のおかげで、ぶしよう私も元気にすごすことができたことを改めて深謝します。)

○ 採集日・1959年7月11日(土)～13日(月)

○ 採集地・栗野岳付近

○ 同行者・(昆虫)堀田宗浩氏(甲虫)、新田栄六氏(蝶、甲虫) (植物)松本培夫氏、
飯島勉氏、木場訓氏

○ 日 程・コース

11 VI 西鹿兒島 駅発(5:38) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ 栗野 駅着(7:25) — 発(8:05)
汽 150円

$\xrightarrow{\text{㊟} \text{ ㊟}}$ 栗野岳温泉着(12:05) — 発(13:15) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ カシワ林 $\xrightarrow{\text{㊟} \text{ ㊟}}$
約7km 約1.5km

(14:00) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ (15:00) — 温泉着(15:30) — 泊(霧)

12 VI 温泉発(9:40) $\xrightarrow{\text{㊟} \text{ 時} \text{ ㊟} \text{ ㊟}}$ 栗野岳(発15:00) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ 別れ道(15:30)

$\xrightarrow{\text{㊟} \text{ ㊟}}$ カシワ林(発17:00) — 温泉着(17:30) — 泊

13 VI 温泉発(9:00) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ カシワ林着(10:00) $\xrightarrow{\text{㊟} \text{ ㊟}}$ 発(13:30)

$\xrightarrow{\text{㊟}}$ 温泉着(14:30) — 温泉発(16:00) $\xrightarrow{\text{㊟} \text{ ㊟}}$ 栗野 駅着(17:40)

— 栗野 駅発(18:20) $\xrightarrow{\text{㊟}}$ 西鹿兒島 駅着(19:55)
汽 150円

(==== 採集コース, 栗野岳温泉自すいで一泊80円, ㊟晴 ㊟曇 ㊟雨)

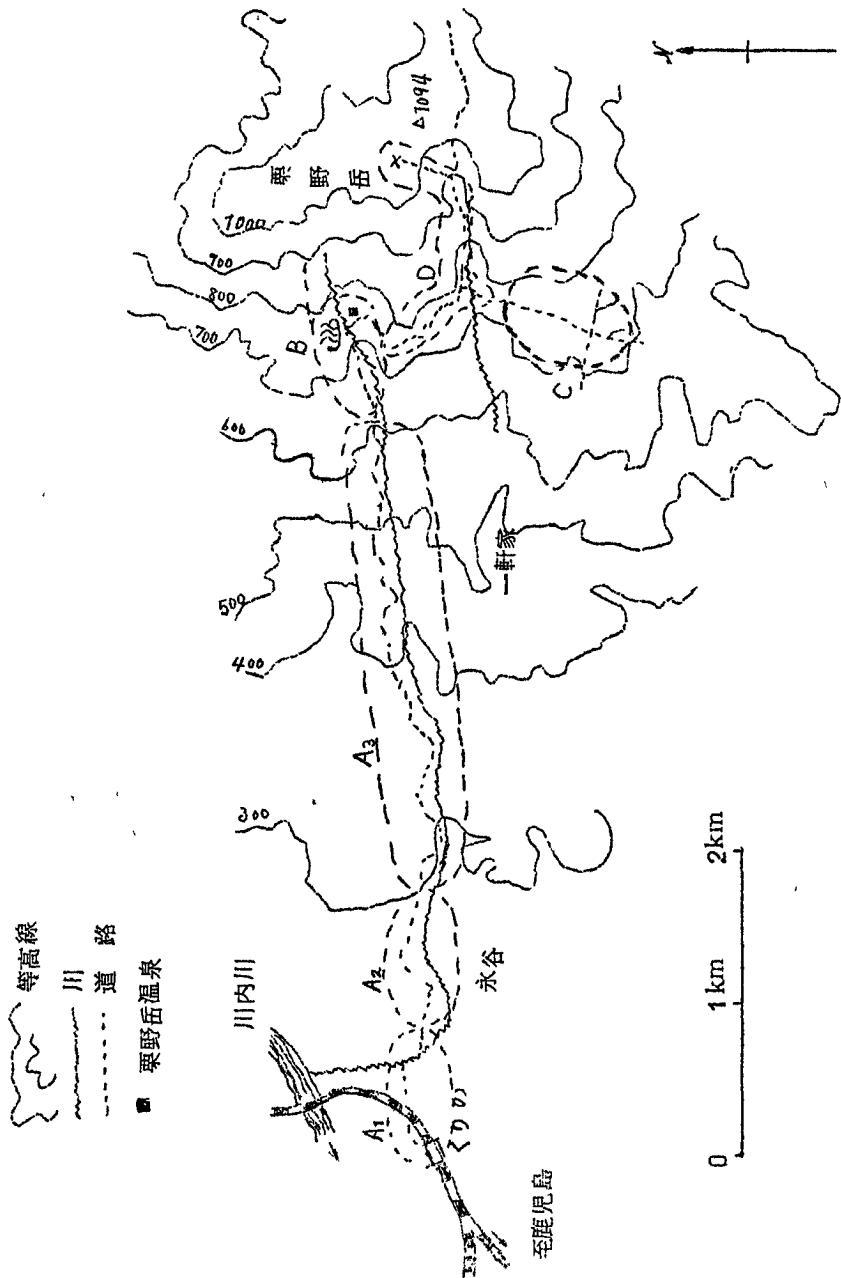
○ 採集コース(地図参照)

A ——— 栗野 駅～栗野岳温泉

A1 (栗野 駅～永谷 ——— 栗野町)

A2 (永谷 ——— 部落)

- A₃ (永谷〜栗野岳温泉 —— ススキの草原などや畑。海拔300〜600m)
- B —— 栗野岳温泉付近 (海拔600〜730m)
- C —— 栗野岳カシワ林 (海拔700〜760m)
- D —— 栗野岳 (温泉〜カシワ林間も含めて海拔700m以上)



Fig(1) 栗野岳 採集コース 地図 (5万分の1)

○ 採集または目撃の記録

() の中には個体数と新鮮度をあらわし、()の前の♀♂の記号または頭数の記してあるものは採集したもの。個体数は 井(多)、+ (普通)、十(少)、数字は目撃頭数。新鮮度は、0 (完全)、1 (小破)、2 (中破) 3 (大破)。採集したもののうち(E. N.)は新田栄六氏採集の記録。私の採集したものは大部分私が所有している。採集地は前記の記号で示す。

(セセリチヨウ科)

1. *Daimio tethys daiseni* Riley, 1921

ダイミヨウセセリ

A $\frac{2}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ (1, 2); O $\frac{11}{\text{VII}}$ (1, 0), $\frac{13}{\text{VII}}$ (幼虫)

L11~12の間に

C 13/ (1頭)

D 12/ (10)を挿入

2. *Choasoes benjaminii japonica* (Murray, 1875)

アオバセセリ

3. *Thoressa varia* (Murray, 1875)

コチャバネセセリ

C $\frac{13}{\text{VII}}$ (1頭)

D $\frac{13}{\text{VII}}$ (1, 0)

A $\frac{2}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ 1頭 (+, 0); B $\frac{11}{\text{VII}}$ (+, 0); O $\frac{11}{\text{VII}}$ (+, 0)

$\frac{12}{\text{VII}}$ (+), $\frac{13}{\text{VII}}$ (+); D $\frac{12}{\text{VII}}$ 1頭 (E. N.) (+)

4. *Isoteinon lamprospilus* O. et R. Felder, 1862) ホソバセセリ

A $\frac{2}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ 1頭 (0); A $\frac{3}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ 1頭 (+, 0); B $\frac{11}{\text{VII}}$ (+, 0)

O $\frac{11}{\text{VII}}$ 1頭 (+, 0), $\frac{13}{\text{VII}}$ 1頭 (井, 0)

○カシワ林Oでは多数の個体が道の両側の湿った「かた」にとまっていた。

5. *Ochlodes ochracea rikuchina* (Butler, 1878) ヒメキマダラセセリ

B $\frac{11}{\text{VII}}$ (1♀, 2); C $\frac{12}{\text{VII}}$ (+), $\frac{13}{\text{VII}}$ (1) D $\frac{12}{\text{VII}}$ (1)

6. *Polytremis vellucida* (Murray, 1875) オオチャバネセセリ

A $\frac{2}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ (+, 1); A $\frac{3}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ 2頭 (+, 1); B $\frac{11}{\text{VII}}$ (井, 0), $\frac{13}{\text{VII}}$ (+);

O $\frac{11}{\text{VII}}$ (井, 0), $\frac{12}{\text{VII}}$ (井, 0~2), $\frac{13}{\text{VII}}$ (井, 0~2);

D $\frac{12}{\text{VII}}$ 2頭 (E. N.) (+, 2)

7. *Pelopidas jansonis* (Butler, 1878) ミヤマチャバネセセリ

A $\frac{3}{\text{VII}} \frac{11}{1}$ ササの一角? (未同定) より亜終令幼虫 1頭採→ $\frac{19}{\text{VII}}$ 脱皮(後死亡);

O $\frac{13}{\text{VII}}$ 1頭 (2); D $\frac{12}{\text{VII}}$ 1頭 (E. N.) (0)

(アゲハチヨウ科)

8. *Byasa alcinous alcinous* (Klug. 1836) ジャコウアゲハ

$C \frac{12}{VII} (+, 0)$, $\frac{13}{VII} (+, 0)$. ウマノスズクサに終令幼虫 (5~6頭) ;

$D \frac{12}{VII}$ ウマノスズクサより終令幼虫採集2頭 (松本氏) $\rightarrow \frac{30}{VII}$ 1♀羽化 , $\frac{2}{VII}$ 1♂羽化 .

9. *Graphium sarpedon nipponum* (Fruhstorfer .1903)

アオスジアゲハ

$A_3 \frac{11}{VII} (+)$, $\frac{13}{VII} (+)$; $B \frac{11}{VII} (+)$, $\frac{13}{VII} (+, 0)$ $C \frac{11}{VII} (+)$,

$\frac{12}{VII} (+)$, $\frac{13}{VII} (+, 0)$; $D \frac{12}{VII} (+)$

10 *Papilio xuthus* Linne. 1767 アゲハチヨウ

$A_3 \frac{11}{VII} (+, 0 \sim 1)$; $D \frac{12}{VII} (+)$

11. *Papilio helenus nicconicolens* Butler, 1881 モンキアゲハ

$D \frac{12}{VII} (+)$

※ ほかに黒いアゲハるいは目撃したが、種の確認はできなかった。

(シロチヨウ科)

12. *Eurema hecabe mandarina* (de l'Orza. 1869) キチヨウ

$A_3 \frac{13}{VII} (+, 0)$; $B \frac{11}{VII} (+, 0)$, $\frac{12}{VII} (+)$; $C \frac{12}{VII} (+)$,

$\frac{13}{VII} (+, 0)$; $D \frac{12}{VII} (+)$

13. *Eurema laeta bethesba* (Janson, 1878) ツマグロキチヨウ

$A_2 \frac{11}{VII} (+, 0)$; $A_3 \frac{11}{VII}$ fae. 1♂ (+, ~~0~~), $\frac{13}{VII} (+, 0 \sim 1)$;

$B \frac{11}{VII} (+)$ $C \frac{11}{VII} (+)$

14. *Pieris rapae crucivora* Boisduval, 1836 モンシロチヨウ

$A_2 \frac{11}{VII} (+)$; $A_3 \frac{11}{VII} (+)$, $\frac{13}{VII} (+)$

15. *Pieris melete melete* Ménétriés, 1857 スジグロシロチヨウ

$A_2 \frac{11}{VII}$ (1頭) ; $A_3 \frac{11}{VII}$ (1頭) ; $B \frac{12}{VII} (+, 0)$; $C \frac{12}{VII} (+)$,

$\frac{13}{VII}$ 1♂ (+, 0) ; $D \frac{12}{VII}$ 1頭 (E. N.) (+)

(シジミチヨウ科)

16. *Narathura japonica* (Murray, 1875) ムラサキシジミ

$O \frac{11}{VII}$ (+), $\frac{12}{VII}$ 1♂ (+, 0), $\frac{13}{VII}$ (+, 0); $D \frac{13}{VII}$ 3頭 (E.N.) (♂, 0)

17. *Antigius attilia* (Bremer, 1861) ミズイロオナガシジミ

A₃ のクヌギ林で数頭目撃したのは本種だつたと思うがとれなかつた。 $\frac{11}{VII}$;
 $C \frac{13}{VII}$ 1頭 (2)

18. *Antigius butleri* (Fenton, 1881) ウスイロオナガシジミ

$O \frac{11}{VII}$ 4頭 (♂, 0~2), $\frac{12}{VII}$ (+), $\frac{13}{VII}$ 24頭 (♂, 0~2)

19. *Chrysozephyrus* ^k*kirishimaensis kirishimaensis*
(Okajima, 1922) キリシマミドリシジミ

E~C (=D) $\frac{12}{VII}$ (1♂ ♀), $\frac{12}{VII}$ 1♂ ; D (海拔1000m付近) $\frac{12}{VII}$ 1♂ (1♂)

※ Dではほかにうらの白い小さいシジミチヨウ (*Zephyrus*?) を目撃したが種名不明。

※ 栗野岳の *Zephyrus* 今回も追加種は出なかつた。

※ *Favonius ultramarinus hayashii* Shirôzu, 1951

へヤシミドリシジミは目撃すらできなかつたが、 $\frac{12}{VII}$ 薬師寺太郎君 (小学生) が採集された1♂を翌日みせていただいた。また、栗野岳産の本種が第5回県昆虫展に出品されていたものを記録しておく。 $\frac{12}{VII}$ 1♂[†] (甲南高・下麦覚); $\frac{20}{VII}$ 1♂ 1♀ (甲南校 奥江慧)

20. *Lycaena phlaeas daimio* (Seitz, 1909) ベニシジミ

$O \frac{11}{VII}$ (1, 2), $\frac{13}{VII}$ 1頭 (+); $D \frac{12}{VII}$ (♂, 0)

21. *Taraka hamada* (Druce, 1875) ゴイシジミ

A₃ $\frac{13}{VII}$ 1♂ (1); $O \frac{11}{VII}$ 1♂ (0), $\frac{12}{VII}$ 1頭 (薬師寺君), $\frac{13}{VII}$ 1頭 (E.N.)

22. *Zizeeria maha argia* (Ménétriés, 1857) ヤマトシジミ

A₂ $\frac{11}{VII}$ (♂, 0~1); A₃ $\frac{11}{VII}$ (+, 0); D (海拔800m付近) $\frac{12}{VII}$ 1♂ (♂)

23. *Celastrina argiolus ladonides* (de I. Orza, 1869)

ルリシジミ

B $\frac{12}{VII}$ 1♂ (1); $O \frac{13}{VII}$ 1♀ (1頭目撃, 0); $D \frac{12}{VII}$ 1♂ 1♀ (1),

1♂ (E. N.)

24. *Celastrina albocaerulea sauteri* Fruhstorfer, 1917

サツマジミ

$C \frac{13}{VII} 1♂ (1)$; $D \frac{12}{VII} 1♂ (2)$

25. *Celastrina dilecta* (Moore, 1879) タツバンリシジミ

B~C (=D) $\frac{13}{VII} 1♂ (1)$ これは栗野岳2頭めの蝶で、日本で3頭めの記録。
(マダラチヨウ科)

26. *Caduga sita nipponica* Moore, 1883 アサギマダラ

$C \frac{11}{VII} (+, 0)$, $\frac{13}{VII} (1, 2)$, $D \frac{12}{VII} 1♂$ (鮫島建氏) (+)
(タテハチヨウ科)

27. *Argyronome laodice japonica* (Ménétries, 1857)

ウラギンスジヒヨウモン

$A_3 \frac{13}{VII} (+)$; $B \frac{11}{VII} 1♂ (+, 0)$; $C \frac{12}{VII} 1♂$, $\frac{13}{VII} 1♀ (+, 0 \sim 1)$ 交尾2組目撃。

28. *Argyronome ruslana lysippe* (Janson, 1877)

オオウラギンスジヒヨウモン

$B \frac{11}{VII} 1♂$

29. *Argynnis paphia geisha* Hemming, 1941 ミドリヒヨウモン

$C \frac{12}{VII} 1♂ (0)$, $\frac{13}{VII} (1♂)$

30. *Argynnis anadyomene midae* Butler, 1866 クモガタヒヨウモン

$C \frac{13}{VII} 1♂ (E. N.)$; $D \frac{12}{VII} 1♂ (0)$

31. *Fabriciana adippe pallescens* (Butler, 1873)

ウラギンヒヨウモン

$C \frac{13}{VII} (+)$; $D \frac{12}{VII} 1♂ (E. N.) (1, 0)$

32. *Fabriciana neriope* (G. et R. Felder, 1862)

オオウラギンヒヨウモン

$B \frac{11}{VII} (+)$; $C \frac{11}{VII} 1♂ (0)$

33. *Argyreus hyperbius* (Linné, 1763) ツマダロヒヨウモン

A₁ $\frac{13}{VII}$ (+); D₁ $\frac{12}{VII}$ 2♂ 1♀ (E.N.) 交尾中 (+)

34. *Ladoga camilla japonica* (Ménétriés, 1857) イチモンジキョウ

A₃ $\frac{11}{VII}$ 1頭 (+, 0) スイカズラより幼虫・終令 1頭 → $\frac{13}{VII}$ 蛹化 → $\frac{20}{VII}$ 羽化: 寄生蜂に寄生された幼虫 1頭 → $\frac{15}{VII}$ 蜂羽化

35. *Neptis aceris intermedia* W.B.Pryer, 1877 コミスジ

A₃ $\frac{13}{VII}$ (+); C₁ $\frac{12}{VII}$ (+), $\frac{13}{VII}$ (+); D₁ $\frac{12}{VII}$ (+)

36. *Araschnia burejana strigosa* Butler, 1866 サカハチチヨウ

B₁ $\frac{11}{VII}$ 1頭 (0); C₁ $\frac{11}{VII}$ (1, 2), $\frac{13}{VII}$ 1頭 (E.N.)

37. *Polygonia caureum* (Linné, 1758) キタテハ

A₂ $\frac{11}{VII}$ (+)

38. *Venessa indica* (Herbst, 1794) アカタテハ

C₁ $\frac{13}{VII}$ (1, 2); D₁ $\frac{12}{VII}$ (1, 0)

39. *Cyrestis thyodamas mabella* Fruhstorfer, 1898

イシガケチヨウ

B₁ $\frac{12}{VII}$ (+, 0); C₁ $\frac{11}{VII}$ (+), $\frac{13}{VII}$ (+, 0); D₁ $\frac{12}{VII}$ 1頭 (+, 0)

(ジャノメチヨウ科)

40. *Ypthima motshulsky* (Bremer et Grey, 1853) ウラナミジャノメ

A₂ $\frac{11}{VII}$ (+); A₃ $\frac{11}{VII}$ 1頭 (+, 2); B₁ $\frac{11}{VII}$ (+, 1), $\frac{12}{VII}$ (+),

$\frac{13}{VII}$ (+, 1~2); C₁ $\frac{11}{VII}$ (+, 0~1), $\frac{12}{VII}$ 1頭 (+, 1~2),

$\frac{13}{VII}$ (+, 1~2); D₁ $\frac{12}{VII}$ (+, 1~2)

41. *Minois dryas bipunctatus* (Motschulsky, 1860)

ジャノメチヨウ

A₃ $\frac{11}{VII}$ 1♂ (0)

42. *Lethes diana* (Butler, 1866) クロヒカゲ

A₂ $\frac{11}{VII}$ 1頭 (+, 0~1); A₃ $\frac{11}{VII}$ (+, 0~1), $\frac{13}{VII}$ (+); B₁ $\frac{11}{VII}$ (+, 0),

$13/VII$ (+, 0); $0^{11}/VII$ (+, 0~1), $13/VII$ (H, 0)

43. *Neope goschkevitschii goschkevitschii* (Ménétriés, 1855)

キマダラヒカゲ

A₃ $13/VII$ (+, 0); B $13/VII$ (1頭); $0^{12}/VII$ (1, 0), $13/VII$ (+, 0)

44. *Mycalesis gotama fulginia* Fruhstorfer, 1911 ヒメジヤノメ

A₂ $11/VII$ (1, 0); $0^{12}/VII$ (1, 0)

45. *Melanitis phedima oitensis* Matsumura, 1919

クロコノマチヨウ

B $12/VII$ fae. 2♀ (0~2) (E. N.); $0^{13}/VII$ fae. 1♂ (1) (E. N.)

※参考文献 福田晴夫(1959): 霧島山産蝶類目録(SATSUMA 8(1)23~42)

※以上, 今回の採集結果の報告にとどめる。

(1959. X. 17 記)

(追) 蝶以外の虫もいくつか採集してあるが, それは適当な方が発表して下さると思う。

⇒ 筆者紹介 田 中 洋

医学部一年生 ここにもう紹介いたすまでもなく, 蝶屋なら, 誰れも, あの恐ろしき奴かと思召しでしょう。そうです彼氏です。静かなる心の底に恐るべきファイトを秘めている。採集となれば誰にも負けない。今度の栗野岳採集でも然り。人より重いザツクをかついでいても常に先頭。蝶が飛んでくると走つて追つかけるのでたまらない。他の蝶採集者は恐慌に見舞れた。最近甲虫の方まで手が伸びてきたので甲虫屋も警戒を要しますね。

栗野岳の甲虫類〔採集報告〕

農学部二年 堀田宗浩

田中氏の蝶報告に続いて、甲虫類を少し報告する。

ここに記載した分は $\frac{11}{VII} \sim \frac{13}{VII}$ ほとんどすべて、D=栗野岳附近(海拔700m以上)で採集したものである。

日程、コースは、田中氏の報告を参照されたし。尚、ゾオムシ、タムムシ、ハムシ科、その他若干あるが同定していないので後日に廻す。

カミキリムシ科

1. ヒゲナガゴマフカミキリ *Palimna liturata* Bates $\frac{12}{VII}$ • 3 exs
堀田(中1頭→田中)
2. ヒゲナガゴブヤヘズカミキリ *Parechthistatus gibber longicornis*
Hayashi $\frac{12}{VII}$ 5 exs 堀田(中2頭→田中)
3. セミスジカミキリ *Rhodopina lewisi* Bates
 $\frac{13}{VII}$ 1 ex
4. チャゴマフカミキリ *Mesosa perplexa* Pascoe
 $\frac{13}{VII}$ 1 ex
5. ラミーカミキリ *Paraglenea fortunei* Saunders
 $\frac{11}{VII}$ 1 ex
6. ヨスジハナカミキリ *Leptura ochraceofasciata* Motschulsky
 $\frac{12}{VII}$ 多数
7. カタシロゴマフリカミキリ *Mesosa hirsuta* Bates
 $\frac{12}{VII}$ 1 ex
8. ヤツメカミキリ *Eutetracha ocelota* Bates
 $\frac{12}{VII}$ 2 ex 田中(中1頭→堀田)
9. ウスイロトラカミキリ *Xylotrachus cuneipennis* Kraatz
 $\frac{12}{VII}$ 2 exs
10. シラホシカミキリ *Glenea relictata* Pascoe
 $\frac{12}{VII}$ 多数
11. ヒメクスイカミキリ *Glenea simulans* Bates
 $\frac{12}{VII}$ • 多数
12. ツマグロハナカミキリ *Leptura arcuata tenuicornis* Motschulsky
 $\frac{12}{VII}$ • 1 ex

13. ビロウドカミキリ *Cyrtiolo fraudator* Bates $\frac{12}{VII}$ 1ex
 14. チャボヒゲナガカミキリ *Xenico+ela pardalina* Bates $\frac{12}{VII}$ 1ex
 15. ヒメリンゴカミキリ *Oberea hebescens* Bates $\frac{12}{VII}$ 1ex

コガネムシ科

1. オオトラフコガネ *Paratrichius doenitzi* Harold
 $\frac{13}{VII}$ ・新田、田中、堀田
 2. マメコガネ *Popillia japonica* Newman $\frac{11}{VII} \sim \frac{13}{VII}$ 多数
 3. ヒメコガネ *Anomala rufocuprea* Motschulsky $\frac{11}{VII} \sim \frac{13}{VII}$ 多数
 4. コアオハナムグリ *Oxycetonia jucunda* Faldermann $\frac{13}{VII}$ 多数
 5. ヒゲナガヒロウドコガネ *Serica boons* Waterhouse $\frac{13}{VII}$ 1ex

コメツキムシ科

1. フタモンウバタマコメツキ *Alaus cutridus vini* Lewis $\frac{11}{VII}$ 田中
 2. ルリツヤハダコメツキ *Athous praenobilis* Lewis $\frac{13}{VII}$ 1ex
 3. オオツヤハダコメツキ *Stenagostus umbratilis* Lewis $\frac{13}{VII}$ 1ex
 4. サビキコリ *Agryonus, binodulus.* Motschulsky $\frac{13}{VII}$ 多数
 5. ウバタマコメツキ *Alaus berus* Candéze $\frac{13}{VII}$ 1ex
 6. ヒゲコメツキ *Pectocorer fortunei* Candéze $\frac{13}{VII}$ 1ex
 7. シモフリコメツキ *Actenicerus Pruinosus* Motschulsky

他不明 7種

※参考書

- ・原色日本昆虫図鑑(改訂版・上)
- ・日本昆虫大図鑑(松村松年)

栗野岳植物採集記

農2年 鮫島 建

夏休みを利用しての生物研究会の採集は7月11日より13日までの2泊3日を栗野岳温泉に自炊して主に栗野岳を中心として行われた。採集は700~1000の高さまで出かけていった。12日は最も歩き3人一緒であったから生研に加わつてから日の浅い僕には大変有意義であった。

(セキコク)へ訂正

石の付近ではたくさんのキノコを見ることが出来た。キノコ中心に採集をやつたら相当の
結果を見たかもしれない。ヤブコウジの赤い実が到る処に見られ、又オモトヤエビネのこの夏に
分業出したと思われるものがあるところにはかたまつて見られた。炭焼小屋の上方に登ると下に
ヤマボウシが白い花を一面につけているのが美しかつた。古木(木の名?)にセキユクと混つ
てウチヨウランの淡紅紫色の花が咲いていてみやげになつた。↑(木の名?)へ訂正

栗野岳の東側の山(不名の山)に登つた時は、マイズルソウが多く見られやや高山に来た感じ
がした。そこから白鳥山がヒヤクシ池に向つて急角度をなしているのも又格別の眺めであつた。
来年でもすすきが原を徒断して海老野高原に出てみたくなつた。

採集植物は多かつたのであるが、不明のものも多く、松本さんに教えてもらつた。以下その一
部をあげる。

ユリ科

1. オオバタケシマラン *Steroptopus amplexifolius*
2. ハナゼキシヨウ *Totieldia nuda*
3. ウバユリ *Cardiocrinum cordatum*
4. マイズルソウ *Majanthemum lifolium*
5. ツクバネソウ *Paris tetraphylla*
6. 不明 2種

オトギソウ科

7. ミズオトギリソウ *Hypericum japonica*
8. ミヤマオトギリソウ *Hypericum senanense*

アリノトウグサ科

9. アリノトウグサ *Halorrhagis micrantha*

アオガズラ科

10. トケノキ *Sesulus turlicate*

シタ科

11. フクロシダ *Woodria manchuriensis*

スイカヅラ科

12. ガマズミ *Viburnum delatatum forma pilosulum*

クス科

13. 不明一種

アカネ科

14. タニワタリノキ *Adina globiflora*

アブラナ科

15. 不明一種

サトイモ科

16. セキソウ *Acorus gramineus*

ミカン科

17. マツカゼソウ *Beennighausenia alluflora*

アケビ科

18. ミツバアケビ *Akebia lobata*

ミカン科

19. ミヤマシキミ *Skimmia japonica*

ハクカ科

20. キセウタ *Leonurus macranthus*

シヤクナグ科

21. ドウダンツツジ *Enkyanthus Cernus, var. rubens*

ラン科

22. エビネ *Galathea discolor*

23. ミヤマウズラ *Goodyera Schlechtendaliana*

24. ウチヨウラン *Gymnadenia rupestris*

ゴマノハグサ科

25. ママコナ *Melampyrum japonicum var. genuinum*

キク科

26. ハンカイソウ *Ligularia japonica*

マメ科

27. 不明 一種

ユキノシタ科

28. ヤマボウシ

29. 不明 一種

エゴノキ科

30. エゴノキ *Styrax japonica*

⇒ 筆者紹介 鮫島 健

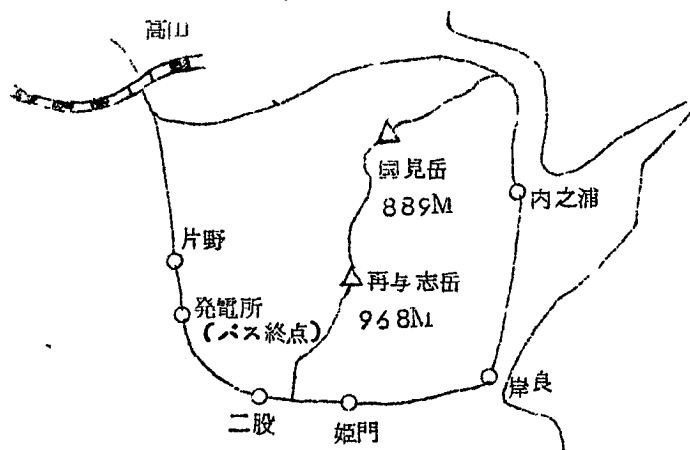
農学部林学科 2年 植物班 生物部員各位に見習っていたきたいことがある。もつと飯
炊きを上手になりなさい。山に採集に行つて飯も炊けずには採集にさしつかえますよ。どうです

か、瑛野岳採集キャンプでの彼のカレーライス的美味かつたこと。家は純心高のすぐ下ですから遊びに行きませんか。趣味として、植物の他に、丘登り、読書、テニス。

大隈半島——国見岳一帯一歩行記

医学部3年 竹 迫 堅之助

学部に行つてから実習その他の都合で土曜の集合採集にほとんど出席出来ず夏休みは持病の為ほとんど治療に費したので、原稿にする程のものもないが、三月、国見岳山脈一帯を歩いたのでここに一寸紹介したいと思う。大隈半島の採集の折に何かの役に立てば幸いである。



鹿屋市から三州バスで川上行に乗ると一時間半くらいで発電所終点に着く。(100円) 発電所といつても近くには発電所は見当らない。附近に人家が二、三軒あるだけである。ここから小さな直を少し登ると広い道に出る。この道を約一里半行くと二股という100戸くらいの炭焼部落に出る。店もあるし、小さな学校もある。特にここには営林所の宿泊所があり一泊一人五十円くらいで泊めてくれる。飯も米を出せば炊いてくれるし風呂もまる。部屋は八帖くらいから、四帖半くらいまで十幾つもあるから相当人数まで泊れる。炭焼部落だけに附近には、田畑はほとんどない。ここから高山町まで森林軌道が通っているから、便利させてもらうこともできる。

ここから、森林軌道に添つて30分くらい登ると、炭焼小屋がある。この炭焼小屋の一軒上の小屋のところから、いよいよ小さな道が再与志岳に通じている。その道は、はなはだ不明瞭である。木々は繁るにまかせられ、実に迷いやすい。実は小生達もついに道を見失つて、ひどい目に合つたのである。本当の道を行くと、頂上まで一時間半くらいで行けそうである。だから採集し

(直道)
へ訂正

ながらでも、二時間半あれば行けると思う。

頂上の眺めは実に絶景である。霧島山頂の比ではないと僕は言いたい。

僕達が登つたのは三月でまだ寒かつたせい、虫のかけらさえ見えなかつたが、植物は豊富だし、従つて昆虫の生糧には絶好の場所ではないかと思う。登山には、片野でバスを下りてここから登り、片野 — 再与志岳 — 二股というコースも考えられるか、再与志から、二股への道を見つけることは始めての人にはほとんど不可能であろうと思われる。 $\frac{1}{5}$ ぐらいの確率しかないだろう。とにかく迷いやすい山である。

二股から一山越すと、船門という小さな部落に出る。この附近は田畑を耕しており農家である。この部落を通つて二股から二時間半くらい歩くと、岸良に着く。途中に一米くらいの広い道路がついており、道の脇は、杉、ヒノキの林が多く採集に適するような場所は少ない。途中道は何回も分れているか、左へ左へと曲ると岸良へ着く。右へ曲ると山奥へ踏み迷つてしまう。岸良は大部大きな部落である。この附近では、ツバネニチョウが採集されているから熱帯性の動植物も多いのではないかと思う。岸良から南へ海岸づたいに下ると船間という部落があるが、この附近は大部採集によいところであるらしい。バスは岸良までしか行かないのでここから二里程歩いて行かなくてはならない。時にはトラックが行くそうである。岸良から、鹿屋までバスで三時間くらい。(240円かかる。)

⇒ 筆者紹介 竹 迫 堅之助

医学部三年生。専門は婦人科医になるとかうかがいましたが真相はわかりませんね。33年度の生研部長として活躍され、それまで四、五年全く停滞していた生研に光をあてて下さつたおかげで、昨年より部活動も活発になり我々ここに *Leben* 2号を発刊できたことは全く感謝にたえない。 *Leben* なる誌名、及びその表紙図案は彼の手によるものである。

屋 久 島 行

1959年10月12日～10月21日

浜 畑 太 海

屋久島は自然の美をそのまま保つているところである。だが現在発電所も建設中であるから近いうちには大分この自然もいためつけられるだろう。花の江河の何ともいえない奥深い美しさは一見したなら再三自然と足をむかわしむる。

10月11日折田汽船にて屋久島目ざして船出す。翌12日の朝船上よりながむる。うつそう

としげつた樹林。高度はないが天にむけてたつ七五岳の岩峰。海岩の切り立つ断岸。すみきつた青い空。青い海。その底には黒々とした岩が目につき。花崗岩らしい白い砂がある海岸近くにはクロマツであろうか。ある種の松が美しい姿を見せている。

12日午後1時頃安房に着き2,3時間後に小杉谷まで軌道を進む。最初のうちは暖地性のものでタマシダ、ヘゴ、クワズイモ等現れる。ヘゴはシダとしては最大のものであろう。大きいものは人の背よりもはるかに高くヒヨウヒヨウとしている。これは南部の暖地にあり大隈種子島、肥前五島、小笠原、八丈島等にもある。常緑木五羊歯で高さは1~4mある。これの稗は園芸に多く利用されている。帰りの船でこの稗を内地に向けて沢山積み出しているのを見た。貴重な種なのにと変な気がする。

スジトツバもあり、クワズイモは湿地に4,5本づつ群れて生育しサトイモの葉によく似ている。

↓(ツゲヤクシマシャクナゲ)へ訂正

太志岳分岐点あたりになると普通の杉とは景観がことなるヤクシガが見えだす。あまり大きいのはない。ウイルソン杉といつてばかりでかい切り株があるらしいがまだ見ていない。ここらあたりになるとクワズイモやヘゴ等の暖地性の植物も姿を消す。伐採所近くになると杉も大きくなり枝ぶりも一様になっているから庭園樹にでもすればよいようなものが多い。花の江河あたりは樹高も低くなりアセビ、ハイノキ、ツゲセクシマシセクナゲ等の落木になる。

ゴゼンタチバナ、ウメバチサウ、イブキ(?)マイズルサウ、シシガシラ、ミヤマヒカゲノカズラ、ハナゴケ、サルツカセ、ここは高層湿地帯でオオミズゴケが大群生しており、その中に種々の苔蘚類が多種類混生しているが名称が分らなかった。シヨウジヨウバカマ、キツカウハグマ、ヨツバシオガマ、ヨツバムグラ、ノギラン、サルトリイバラ、ヒメオトキリサウ等もある。又サルトリイバラがい縮したと思われる一種があつた。葉は円形に近く、毛行脈を持ち葉の長いところで15mm程である。サルトリイバラによく似ているとげもある。

花の江河からしばらく登りつめると一大屋久笹帯となる。高さは1m前後でいくぶん黒味をおびる。宮の浦岳(1935m)頂上までセクザサでおおわれ、所々岩が散見出来る。頂上はセクザサの他にオオバコ(?)もある。ここと永田岳の鞍部にホソバヤマハヘコがある。永田岳を過ぎてしばらくたつたところ五六頭のヤクシカがいた。我々に気付くとすぐ純白の尻を見せ下の方に去っていった。又すぐに別な群が現われ、これらは山の頂上に向つてにげ出す。ビヨンビヨンとよくもあのような坂を登れるものだと思う。

このヤクシカは体は大きくなく(せいせい1m位)尻には純白の房々としげつた毛があり色はいわゆる鹿毛というやつである。鹿は頂(上方)に向つて行動するのが普通のようなだ。

鳴き声もたまにする。しかしあまり風情は感じない。声もいろいろあるようだ。金属音にている。白骨化した死体を見つける。角をさがしたがみつからない。このあたりは道という道はなく鹿道をたどつて歩かねばならない。

後になつたがヤクシマシセクナゲは軌道の終点あたりから現われ宮の浦岳の頂上までも生育している。6月頃開花するが実に美事なものらしい。以上で終るがこの屋久島は十分調査する価値

がある。亜熱帯から亜高山帯の要素を持つからして研究するにも面白い。

1959. 10. 9

⇒ 筆者紹介 浜 畑 太 海

文理学部一年生 植絛 山岳部の一員として、北は日本アルプス、久住から南は屋久島など、あの立派な体軀をはこんで活躍中。その合間にも、もちろん植物のことは忘れない。彼の生研会員としてのこれからの活躍は、おおいに期待されてよいでしょう。

仙人掌 (サボテン) 記

農学部1年 木 場 訓

私が始めて仙人掌なるものを知り興味を持ったのは高校に入つて、間もなくであつた。それまでは仙人掌とはどんなものかも知らなかつたのである。一口に仙人掌と言つても実に多種多様なものである。大きさは小指大から数メートルに及ぶもの、色は白色、濃紫色、緑色、紅色、刺は刺〜針及び綿毛を持つものもある。ところで、仙人掌と言う言葉は、**言海**によると「石鹼、即ちシャボンから転化した言葉であつて、物に油の着いたのを能く吸い取るから、名とすという」とある。

↑(言海 大言海)へ訂正

1830年(享和3年)発行 小野蘭山著「本草綱目啓蒙」の石鹼の項に「サボテンと言う草は秘伝花鏡の仙人掌なり。これを疊に油のついたとき、比喩を横に切つて磨すれば、油を吸いとるに依つて、シャボンと云うを、転じて、俗にサボテンと云う。皆本条のシャボンより出たる名なりと云う」とあるそうである。

サボテンの故郷は概して南北両米地域の乾燥地帯で、北緯56度から南緯55度まで及ぶが、高温多湿の森林帯から、標高4000メートル以上で冬期に於いては、雪をいただいているような所に生育するものもあるのである。(ロビウイア属)

サボテンは双子葉植物で離弁花であり、種類約1000種と云われ、1938年発表のバツケベルグ分類法に於いて、3亜科、4族 9亜族 30次亜族、178属を設けている。

サボテンはその環境の変化に応じて

a. 木の葉サボテン属……ブラジル、パラグワイ等の灌木地帯

b. **蕁**サボテン属……やや乾燥した所

←(蕁扇 扇)へ訂正

c. **サボテン**(リブサリス)属

←(サボテン 蕁サボテン)へ訂正

d. 孔雀サボテン(フィロカックス)属

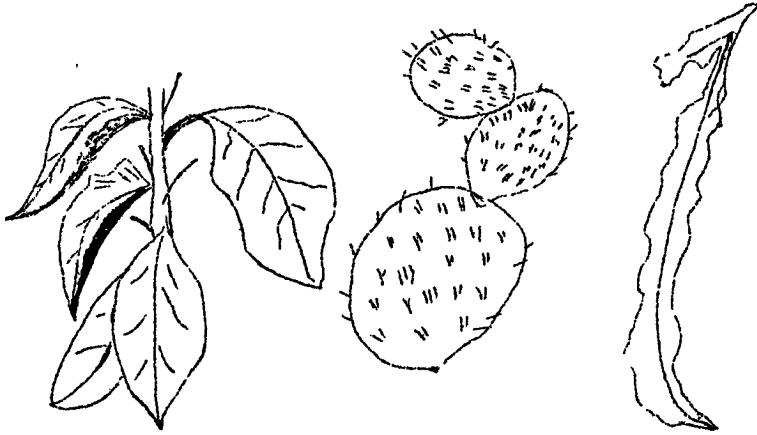
e. 柱サボテン(ケレウス)属

g. 玉サボテン(エキノカクタス)属

等に分けられる。(後図参)

ところでサボテンが発芽するときには実に可愛いものである。黒い帽子を脱ぎ、小さな二枚の葉を出し、やがてその中から、これ又小さな丸い頭をのぞかせる。やがてこれらが強大な刺を出したり、白い綿毛や、金色、紅色に輝く針や白い斑点を現し、それぞれの特長を持つのである。

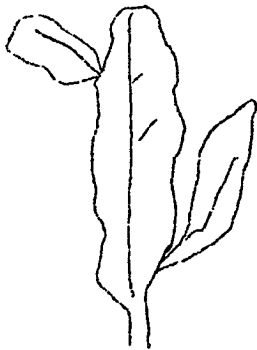
図



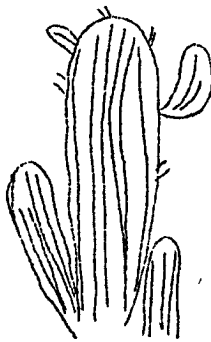
a. 木の葉

b. 頭

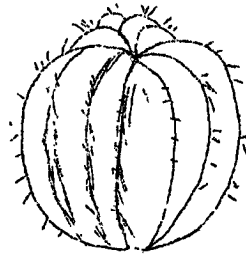
c. 莖



d. 孔雀



e. 柱類



f. 玉状

⇒ 筆者紹介 本場 訓

農学部一年 植物班 甲南高校出身 部会にもよく出席するし、採集にも然り。真面目なる模範部員。サボテンは高校時代からずいぶん集め研究しているようで、これで採集旅費をかせいだことがあまるそうだ。詳しいことは彼にお聞き願いたい。今後生研の中心となつての活躍が大いに期待される。

鹿児島市附近産ゴミムシ類 第1報

農学部二年 堀田宗浩

表題には大きく鹿児島市と書いたがここに上げるのは、鴨池鹿児島大学の周辺で、主に燈火に飛来したものを採集したものである。

生研に入手して一年半にもなるが、我が不徳の成すところ、城山・吉野等については、未だ採集不足で少い。尚16種程未同程のまま残っている。それでここに載せているのは鹿児島市附近のほんの一部に過ぎず、先ずは第1報である。

Harpalidae ゴミムシ科

1. *Platysma forte* Morawitz オオナガゴミムシ 11-X.58 寺山
2. *Dishiss japonicus* Andrewes ニホンヨツボシゴミムシ 11-X.58 寺山
3. *Planetes runcticeps* Andrewes フタホシスジパネゴモクムシ
10-X.58 唐溱
4. *Anolegenicus cyanescens* Hope キバリゴモクムシ 1-IX.58 唐溱
5. *Dolichus halensis* Schaller f. *ruficollis* Jeannel
セアカゴミムシ 10-X.58 唐溱
6. f. *aeohalensis* Jeannel セアカゴミムシ 10-IX.58, 5-VI.58,
18-VI.58, 20-VI.58 唐溱
7. f. *flavicorni* Fabricius 5-IX.58, 5-V.58, 5-VI.58 唐溱
8. *Ohlaenius virgulifer* Chdudoir アオワアトゴミムシ 9-VI.58 唐溱
9. *Ohlaenius abstersus* Bates ヘラクロアオゴミムシ 1-IX.58 唐溱
10. *Lachnolebia cribricollis*. Morawitz キクビアオアトキリゴミムシ
9-VI.58 唐溱
11. *Calleida chloroptera lepida* Redtenbacher
キガシラアオアトキリゴミムシ 不明 唐溱
12. *Brachinus scotomedes* Redtenbacher オオホソクビゴミムシ
11-X.58 寺山
13. *Pheropsophus jessoensis* Morawitz ミイデラゴミムシ
不明 寺山 30-VI.59 烏帽子岳
14. *Trigonotoma lewisii* Bates ルイスナガゴミムシ 11-X.58
15. *Harpalus tinctulus* Bates アカアシマルガタゴモクムシ
15-VI.58 寺山
16. *Rbagadus microcephalus* Motschlsky コガシラナガゴミムシ
5-VI.58 唐溱

17. *Lesticus magnus* Motschulsky オオゴミムシ 不明 唐漢
 18. *Lebidia octoguttata*. Morawitz ヤホシゴミムシ 不明 唐漢
 19. *Amara chalcophaea* Bates コアオマルガタゴミムシ 5-VI.58 唐漢
 20. *Platysma rotundangulum* Morawitz ヒメホソナガゴミムシ
 21. *Bradytus macros* Bates イグチマルガタゴミムシ 5-VI.58 唐漢
 22. *Cyrtotus nitens* Putzeys ナガマルガタゴミムシ 5-VI.58 唐漢
 23. *Patrobus flavipes* Motschulsky キアカヌレチゴミムシ
 5-VI.58 唐漢

24. *Chlaenius naeviger* Morawitz フトボシアオゴミムシ 13-VII.59 栗野

Scaritidae ヒヨウタンゴミムシ科

1. *Scarites acutidens* Chaudoir ホソヒヨウタンゴミムシ 10-III.59 寺山
 2. *Clivina castanea* Westwood ホソヒメヒヨウタンゴミムシ 11-VI.59 唐漢

Carabidae オサムシ科

1. *Apotomopterus dehaani* Chaudir オオオサムシ 10-VI.58 唐漢
 11-X.58 寺山
 2. *Apotomopterus japonicus* Motschulsky ヒメオサムシ
 10-VI.58 唐漢 22-VI.58 長田町

→ 参考文献 ←

- 原色日本昆虫図鑑(上): 近畿甲虫同好会
 原色日本昆虫図鑑(上) 増補版: 近畿甲虫同好会
 日本昆虫大図鑑: 松村松年
 日本の甲虫: 横山桐郎
 九州の昆虫: 福岡虫の会, 筑紫昆虫同好会

⇒ 筆者紹介 堀田 宗 浩

農学部農芸化学科 2年 甲虫(特にカミキリ, ゴミムシ) 産地は長崎。彼が鹿大に来たのは鹿児島の自然(その美しさと, そこに生息する特性ある虫ケラ)に魅されたのも大きい原因のようだ。現在生研の部長として活躍しているが少し温和し過ぎますね。虫屋の他に趣味はだいたい広い。丘(100m以下の山) 登り, 40円洋画鑑賞, 古本屋あせり, 読書(特にロマン・ロラン) エトセトラ, 但し酒と madchen には弱いようだ。

小林市付近のカメムシ類

田 中 洋

小林市に住んでいた1956年頃、小林昆虫同好会の会員の方々の御協力を得て、すこしずつカメムシを採集していた。そこで整理して、九州大学農学部昆虫学教室の日高輝展氏のもとにお送りして同定していただいたので、小林のカメムシ採集の第一歩として記録しておきたい。

また、なくなられた九州大学の江崎悦三先生に1956年に同定していただいた「高千穂峰のカメムシ」も記して参考とする。(標本はみな九州大学にある。)

○ 採集目録 (I)

(Cydnidae ツチカメムシ科)

① Gen. 不明 1 sp. 2♂ 1♀ (小林) 1956.VI.21

2. *Macroscytus japonensis* Scott ツチカメムシ (日向前田) 1956.V.6

(Plataspidae マルカメムシ科)

3. *Cantosoma punctissimum* Montandon マルカメムシ

1♂ (小林) 1956.VI.21

④ *Cantosoma* sp. 1♂ (三ノ宮) 1956.VII.26

(Pentatomidae カメムシ科)

5. *Eysarcoris ventralis* Westwood シラホシカメムシ

1♂ 1♀ (小林市) 1956.IV.9, 1956.IV.12 1頭 1956.VI.6

6. *Eysarcoris* sp. 3♀ (小林市) 1956.V.2, 1956.V.6

7. *Eysarcoris* sp. 2♂ 2♀ (小林市 & 高原町) 1956.IV.26 & V.4

8. *Aenaria lewisi* Scott シロヘリカメムシ 1♂ (高原町) 1956.V.4

9. *Carbula humerigera* Uhler トゲカメムシ 1♂ (御池) 1956.VII.15

10. *Palomena angulosa* Motschulsky エゾアオカメムシ

1♂ (高原町) 1956.VII.30

11. *Eurydemo rugosa* Motschulsky ナガメ 1♀ (小林) 1956.IV.1

12. *Nezara antennata* Scott アオクサカメムシ

1♂ 1♀ (小林) 1956.IV.29, 1956.VII.26

13. *Piezodorus rubro fasciatus* Fabricius イチモンジカメムシ

(三ノ宮) 1956.VIII.26

14. *Zicrona coerule* Linne' ルリクチブトカメムシ

1♂ (小林) 1956.IV.13

15. *Parastrachia japonensis* Scott ベニクチブトカメムシ

2♂ 1♀ (小林) 1956.VI.6 & VI.9, 1957.V.29

16. *Scotinophara lurida* Burmeister イネノクロカメムシ

- 1♀ (小林) 1956.Ⅳ.21. 日向前田 1956.Ⅴ.6
17. *Megymenum gracilicorne* Dallas ノロギリカメムシ
1♂ (小林) 1956.Ⅶ.9
18. *Gonopsis affinis* Uhler エビイロカメムシ 1頭 (小林) 1956.Ⅵ.9
(Acanthosomidae ツメカメムシ科)
19. *Acatosoma denticauda* Jakovlev セアカツノカメムシ
2♂ (高千穂峰) 1956.Ⅵ.22 (後記)
20. *Elasmostethus humeralis* Jakovlev ベニモンカメムシ
3♀ (小林) 1956.Ⅴ.6
(Coreidae ヘリカメムシ科)
21. *Homocerus dilatus* Horváth ヘラビロヘリカメムシ
1♀ (小林) 1956.Ⅶ.1
22. *Homocerus unipunctatus* Thunberg ホシヘラビロヘリカメムシ
1♀ (小林) 1956.Ⅴ.20
23. *Colpura (Hygia) opaca* Uhler ツマキヘリカメムシ
多数 (小林) 1956.Ⅶ.2, Ⅶ.30 1 (瀬戸山) 1956.Ⅴ.20
24. *Colpura (Hygia) latinensis* Motschulsky
オオツマキヘリカメムシ 1♂ 1♀ (小林) 1956.Ⅶ.21
25. *Cletus trigonus* Thunberg ホソヘリカメムシ
1♂ 1♀ (小林) 1956.Ⅶ.14, 1 (坂元) 1956.Ⅶ.10
26. *Leptocoris varicornis* Fabricius クモヘリカメムシ
1♀ (小林) 1956.Ⅶ.28
27. *Riptortus clanatus* Thunberg ホソヘリカメムシ
1♀ (小林) 1956.Ⅳ.29
28. *Anacanthocoris stricornis* Scott オオクモヘリカメムシ
1 (小林市通り町) 1958.Ⅷ
(Rhopalidae ブチヘリカメムシ科)
29. *Stictopleurus* sp. 1♂ (小林) 1956.Ⅴ.26
(Pyrrhocoridae ホシカメムシ科)
30. *Pyrrhocoris tibialis* Stal フタモンホシカメムシ
1 (小林市) 1956.Ⅳ.18
(Lygaeidae ナガカメムシ科)
31. *Pachyrachius pallicornis* Dallas ヨツボシヒヨウタンナガカメ
1♀ (小林) 1956.Ⅶ.13
32. *Metochus abbreviatus* Scott オオモンシロナガカメムシ

♀ (小林) 1956.Ⅳ.21

(Meziridae オオヒラタカメムシ科)

- ③3. *Meziria membranacia* Fabricius クロヒラタカメムシ
1♀ (高麗町) 1956.V.4

(Reduviidae サシガメ科)

- ③4. *Haematoloecha nigrorufa* Stål アカシマサシガメ
2♀ (小林) 1956.Ⅳ.22 & V.3

35. *Ectrychotes andreae* Thunberg ヒロウドサシガメ
1♂1♀ (小林) 1956.Ⅳ.24

- ③6. *Agriesphodrus dohrni* Signoref ヨコヅナサシガメ
1♀ (小林) 1956.VI.3

37. *Velinus nodipes* Uhler ヤニサシガメ 2幼虫 (小林) 1956.Ⅲ.17~18
(Miridae メトラカメムシ科)

38. *Lygus* sp. 1♀ (小林) 1956.VI.7

39. *Proboscidooris* sp. 2♀ (小林) 1956.Ⅲ.23
(Belostomatidae タガメ科)

40. *Dirolonychus japonicus* Vuillefroy コオイムシ
1♀ (小林) 1956.Ⅳ.28

(Pelogmiidae メミズムシ科)

41. *Ochterus marginatus* Latreille メミズムシ
1♂ (高麗町) 1956.V.4

※ (○印は分布上珍しい種。)

以上、1957年暮~1959年初夏までに同定していただいたもの。

○「高千穂峰頂上に飛んできたカメムシ類」

1956年6月22日 (志和池昭一郎氏採集)

- ① *Physopelta cincticollis* Stål (1頭) ヒメホシカメムシ
② *Reduvius humeralis* Scott (1頭) クビアカサシガメ
③ *Hygia* sp. (学名未定) (近似種2sp.ある) (1頭)
4. *Carbula humerigera* Uhler (1頭) トゲカメムシ
⑤ *Molipteryx fuliginosa* Uhler (1頭) オオヘリカメムシ
6. *Acanthosoma denticauca* Jakovlev (多) セアカツノカメムシ
⑦ *A. labiduroides* Jakovlev (1♀) ハサミツノカメムシ
8. *Velinus nodipes* Uhler (1) ヤニサシガメ

※ ○印は前記に含まれないもの。

(1959.X.18 記)

※) 宮崎県小林市 (霧島山の北麓)

部 員 名 簿

- | | |
|---------|---|
| (迫 堅之助 | 32.入.M 蛾 鹿屋市北田町8235番地 鹿児島市鴨池町531 川路アパート |
| 小坂 宗 継 | 32.入.S 昆虫 鹿児島県能毛郡南種子町西の1769 市内 武町147 迫田方 |
| 市 江 達 | 31.入.S 植物 福岡県豊前市合河町下河内1837 市内鴨池町 望岳寮 |
| 戸 越. 進 | 32.入.A 昆虫 鹿児島県日置郡吹上町田尻2520 同 上 |
| 堀 田 宗 浩 | 33.入.A 甲虫 長崎県西彼杵郡高島町仲山2611 市内鴨池町389 月野方 |
| 小 野 輝 男 | 33.入.A 蝶 大分県北海部郡坂ノ市町駅前通り 市内郡元町1150 新添方 |
| 三穂野 善 則 | 33.入.A 植物 熊本県玉名市高瀬254 市内上荒田町1940 鹿大対岳寮 北6 |
| 松 本 培 夫 | 33.入.S 植物 熊本県下益城郡松橋町松橋521 市内西田町202 田方 |
| 鮫 島 建 | 33.入.A 植物 市内鴨池町1849 同 上 |
| 木 場 訓 | 34.入.A 植物 市内鴨池町1016 同 上 |
| 浜 畑 太 海 | 34.入.S 植物 市内鴨池町唐湊1714 |

| | |
|---------|---|
| 田 中 洋 | 34。入。M 蝶。甲虫 市内薬師町91 同 上 |
| 新 田 栄 六 | 33。入。A 昆虫 |
| 富 永 文 治 | 市内下伊敷町666 県学生寮 33。入。A 植物 |
| 井 下 浩 一 | 市内上荒田町農学部対岳寮 33。入。A 蝶 福岡県田川市大字伊田1016 市内郡元真砂306 川畑方 |
| 丸 野 伊勢夫 | 33。入。丑 植物 市内常盤町 1021 同 上 |
| 榑下町 鉦 敏 | 34。入。A 蝶 川辺郡知覧町西元3623 市内鵜池町531 川路アパート |
| 山 下 智 司 | 34。入。F 魚 京都市中京烏丸四条上ル 市内鵜池町唐湊1368 永井利清方 |

編 集 後 記

原稿の通合で予定より少し、遅れましたが才2号を発刊できまして、部員一同、ひじょうなる喜びです。才1号と比べますと、印刷所に依頼した点など、だいぶ負担がついてきました。内容の方は、採集報告、その他随想が主で、部員全体としての研究報告ができなかつたようです。今後、この方面にも力を入れたいと思います。

向編集には次の者が当りました。

堀 田 宗 浩 田 中 洋

LEBEN 第 2 号

昭和34年11月30日印刷

昭和34年11月15日発行

編集責任 堀田 宗浩

発 行 鹿児島大学生物才二研究会

印 刷 鹿児島市山下町98

明かるい窓社

電話 ② - 7 3 8 5

正 誤 表

| P | 行 | 誤 | 正 |
|--------|---------------------|---|--|
| 4 | 1 8, 12, 17, 19, 22 | 甲 折 | 甲 折 |
| 6 8 | 上から 11-12 の間 | ① の記号が、 | ① c $\frac{13}{VII}$ (1頭)・D $\frac{13}{VII}$ (10) を補う。 |
| 9 | 下から 7 行 | A ₃ $\frac{11}{VII}$ 1台 (1台 (+0-)) | A ₃ $\frac{11}{VII}$ 1台 (1台 (+0)) |
| 10 | 上から 12 行 | (1台 (1♀)) | (1台 (1♀)) |
| " | " | D (海拔 1,000 m 付近) | $\frac{13}{VII}$ を補う |
| " | 下から 10 行 | の次に $\frac{13}{VII}$ 1台 | $\frac{13}{VII}$ 1♀ |
| 12 | 下から 2 行 | クロヒカゲ | クロヒカゲ |
| 13 | 上から 8 行 | クロコノマチョウ | クロコノマチョウ |
| 6 ~ 13 | | Ménétries | Ménétries |
| 16 | 上から 4 行 | 巨木(ネコ名?)に セキユク | 巨木(ネコ名?)に セキコク |
| 21 | 上から 12 行 | 言 海 | 文言海 言 |
| 24 | 上から 26 行 | b 葦 翁 オボテン | b 葦 翁 オボテン |
| 27 | 上から 27 行 | c オボテン | c 葦 オボテン |
| 18 | 下から 9 行 | 直 | 道 |
| 20 | 上から 20 行 | ツゲセクシマシセク ナゲ | ツゲヤクシマ シヤクナゲ |

からは未発見 (Shim-25110, 25155)。

2. *Macromitrium japonicum* Doz. et Nalk, (Orthotrichaceae).

本種は日本本土, 台湾, 支那から知られては種があるが紅頭嶼からは未記録であった。(S-25066, 25073, 25065, 25071)。

3. *Macromitrium holomitrioides* Nishii (Orthotrichaceae).

本種は琉球群島にのみ台湾本島から最初に記載された種で、琉球列島にも産する事が判明した。紅頭嶼からは未記録の種であった。(S-25026)

4. *Rhacopilum Terriet* Thériot. (Rhacopilaceae).

琉球列島と台湾から知られては種である。紅頭嶼にも産する事が判明した。(S-25190)。

5. *Ae. obryopsis periclit* (Card.) Broth. (Metzoriaceae).

Metzoriaceae のものは紅頭嶼からは未だ一種も報告されては居ない。本種は琉球列島と台湾の産種と考えられては、先年、筆者らの琉球列島の山岳上にも産する事が報告されている。本種も紅頭嶼にも産する事が記録がある。(S-24990, 24993, 25070, 25101, 25121, 25094, 25145)

6. *Neslereia obtusata* (Mont.) Fleisch. (Neskeraceae).

日本本土, 琉球, 台湾, 支那から知られては種があるが紅頭嶼からは未だ報告がない。(S-25088)。

7. *Chaetomitriopsis glaucocarpa* (Reinwa) Fleisch (Hookeriaceae)

セルビア, フランス, イタリア, 台湾から知られては種があるが紅頭嶼からは未記録であったが、今回採集品中に見出した。(S-25032, 25167)。

8. *Herpelinuron tocciae* (Sull. et Lesq.) Card. (Thuidiaceae).

日本本土, 琉球, 朝鮮, 支那, 台湾, アフリカ, 北米, 南米に広く知られて種であるが紅頭嶼からは未記録であった。(S-25007)。

以上の種が本島から初めて記録されたか、同定したのが一部である。今後の研究により今後何種かの新しい記録がある事が予想される。
(鹿児島大学 生物学教授)